

動物を扱う部民を中心とした渡来文化の考古学的研究-文献と埴輪・壁画資料による比較分析の視点から-

著者	基峰 修
著者別表示	Kimine Osamu
雑誌名	博士論文要旨Abstract
学位授与番号	13301甲第5107号
学位名	博士（文学）
学位授与年月日	2020-03-22
URL	http://hdl.handle.net/2297/00058760

学 位 論 文 要 旨

Dissertation Abstract

学位請求論文題名 Dissertation Title

動物を扱う部民を中心とした渡来文化の考古学的研究
—文献と埴輪・壁画資料による比較分析の視点から—

(和訳または英訳) Japanese or English Translation

Archeological study of culture introduced from overseas with a
mainly *Bemin* (部民) dealing with animals
—From the viewpoint of comparative analysis by Bibliographic
Material and *Haniwa* / Tomb Murals—

人間社会環境学 専 攻 (Division)

氏 名 (Name) 基峰 修

主任指導教員氏名 (Primary Supervisor) 古畑 徹

(注) 学位論文要旨の表紙

Note: This is the cover page of the dissertation abstract.

Archeological study of culture introduced from overseas with a
mainly *Bemin* (部民) dealing with animals
—From the viewpoint of comparative analysis by Bibliographic
Material and *Haniwa* / Tomb Murals—

Osamu Kimine

Abstract

In this paper, we conduct a comparative analysis of literature and of both haniwa and mural materials to study the *Bemin* (部民) in charge of the animals (livestock) brought over as a result of the wave of immigration during the 5th and 6th centuries. Through this process, we clarify a number of commonalities and differences in order to identify their historical and cultural characteristics, as well as to investigate the reality of the early immigration period.

We discuss falcon-keepers, with a focus on falcon bells and the organization of falconry; horse-keepers, with an emphasis on social status and the creation of a military horse breeding system; and cattle-keepers, regarding both the production and characteristics of medicines and the period of transmission relating to the story of the cowherd and the weaver girl. We also discuss pig-keepers in the context of the transmission of horn instruments, the role of *Rikishi* (力士) in the genealogy of the *Henpeimage* (扁平鬚), and four-deity paintings in terms of the interpretation and genealogy of the murals in Takehara Tomb (Miyawaka City, Fukuoka Prefecture).

The production and breeding of cattle and horses, falconry, and sumo wrestling were all brought over mainly during the 5th century and then became organized starting from the 6th century. It was also during this period that four-deity images were brought over. In Japan in the 5th and 6th centuries, while looking at the military and political relations of the Korean peninsula countries, conveniently accepted the technology and culture and used it to organizing the *Bemin* (部民).

学位論文要旨

本論の目的は、古墳時代中期から後期（5・6世紀）の日本へと、朝鮮諸国から伝わった渡来文化について、渡来系動物（家畜）を扱う部民などの分析を中心に、その歴史的・文化的特性の抽出と渡来初期の実態を明確にし、その歴史的意義を追究することである。国際的な文化の受容にあたって、渡来文化をどのように受け入れて、部民の組織化をなしえていったのかを考えるということが、本論の中心課題である。

本論は、考古学が中心であるが、文献史学の成果を取り入れたアプローチ方法による古墳時代社会構造についての復元論の実践例でもある。

研究をすすめるうえで、潜在する渡来文化の要素を導き出すために、家畜として渡来した動物と一緒に伝わった飼養・飼育の技術に注目することで、その技術を持つ部民に注目した。部民の中から、鷹甘（飼）、馬甘（飼）、牛甘（飼）、猪甘（飼）を選んで分析対象とした。さらに、渡来初期の実態を明確にするために、力士、四神図を分析の対象とした。

鷹甘（飼）については、鷹鈴と鷹狩りの組織化の問題を中心に、追究を行った。歴史的・文化的特性としては、『日本書紀』・『播磨国風土記』の記述と、大日山35号墳（和歌山県和歌山市）の鷹形埴輪などやオクマン山古墳（群馬県太田市）の鷹匠埴輪など、鷹関連の形象埴輪と、高句麗壁画古墳の三室塚（中国吉林省集安市）などの鷹狩り図に注目して、比較分析を行い、倭国で鷹甘（飼）が飼育・訓練した鷹の特徴である尾羽に付けた鷹鈴が、古代朝鮮から伝わった渡来文化の根拠であることを指摘した。鷹鈴は、鷹狩りで鷹の居場所を知るために欠かすことの出来ない道具で、現在でも用途・機能に変わりはない。現在の日本の鷹狩りでも、鷹の尾羽に鈴革を縫い付けて、鈴板で鈴の音を反響させ、鷹の居場所の特定と異常の際に状態の把握が可能となっている。渡来初期の実態については、高句麗や百済で盛行した鷹狩りが、倭国では鷹飼部として組織化され、6世紀代に列島的な規模で拡充されたことを指摘した。さらに、鷹形埴輪や鷹匠埴輪の古墳での配列検討から、従来の研究で指摘・支持されてきた鷹匠埴輪が被葬者（支配者層）の姿を現したという見解ではなく、武人や力士と同等級の職能技術者で、被葬者（支配者層）に従属して近侍・奉仕した部民である鷹甘（飼）の正装の姿を表したという新見解を示した。渡来当初には、倭国では馬と一体となった騎馬スタイルが成立していなかったことも指摘した。

馬甘（飼）については、身分的扱いと軍馬生産体制の成立に関する問題を中心に、追究を行った。歴史的・文化的特性については、『日本書紀』の記述と、片手を挙げ片手を下げる姿勢で腰帯に鎌を装着した例が数多い馬甘（飼）人物埴輪の特徴を整理し、装飾古墳の馬牽き人物図文、高句麗壁画古墳の徳興里古墳（北朝鮮平安南道南浦市）などの馬牽き人物図の比較分析を行い、馬甘（飼）が専ら男性の職業で、顔面へ入れ墨が施されたことや、馬の飼育具として鎌が必需品で、飼育・調教した馬を牽く姿がその特色を最もよく表していることを指摘するとともに、馬甘（飼）人物埴輪の古墳配列の位置や順番、他の人物埴輪と比べて簡素に表現されていることから、馬甘（飼）は被葬者（首長）に

従属して近侍・奉仕した部民としては、高い身分の存在でなかったと指摘した。このことは、倭国社会での馬甘（飼）の身分体系をよく表しているといえる。渡来初期の実態については、5世紀後半の倭国での馬匹生産の急速な受容を再確認し、朝鮮諸国の領土情勢と密接に連動したものであったと考えられていることから、高句麗の領土拡大（南下）による武力制圧の危機にさらされた百済・加耶が、倭国への軍事力増強の援助を求めた結果、倭国で迅速に軍馬生産体制の確立がなされたといえる。初期の馬匹生産については、渡来人の馬甘（飼）集団が各地に移住させられて飼養・飼育に従事し、倭王権が主導して馬飼部の組織化がなされたと考えられる。鷹甘（飼）と同様に、6世紀以降に列島的な規模で拡充がなされたといえる。

牛甘（飼）については、薬としての牛乳生産とその性格に関する問題を中心に、追究を行った。歴史的・文化的特性については、『日本書紀』・『古事記』の記述と、四条7号墳（奈良県橿原市）などの牛形埴輪、南郷大東遺跡（奈良県御所市）などのウシ遺存体、牛の可能性のある装飾古墳の図文、高句麗壁画古墳では安岳3号墳（北朝鮮黄海南道安岳郡）などの牛舎図や、舞踊塚（中国吉林省集安市）などの牛轎車図を対象とした比較分析を行い、5世紀後半以前に、牛が馬と一緒に飼育や管理の技術とともに、朝鮮半島から渡来した可能性が高いことを指摘した。軍馬生産を目的とした馬匹生産に比べて、牛の飼養・飼育は極めて少なかったと見られ、その理由としては、牛の利用がごく限られた支配者層へ供給された薬である牛乳・乳製品の生産に限定されていたため、数多くの牛を生産する必要がなかったと考えた。渡来初期の実態については、牛は馬甘（飼）によって馬と一緒に飼育されていた可能性が高く、馬甘（飼）と牛甘（飼）は明確に分化された存在ではなかったと考えられた。これが倭国社会で部民である牛甘（飼）が、専門集団の牛飼部として発達しなかった理由といえ、むしろ、牛甘（飼）の特性であったと指摘した。

さらに、牛の渡来と関わりが深いと考えられる牽牛織女説話の伝来年代に関する問題を中心に検討し、補足追究を行った。牽牛織女説話については、『日本書紀』の記述と、甲塚古墳（栃木県下野市）の機織形埴輪、高句麗壁画古墳の徳興里古墳の牽牛織女図、日本の七夕説話と結び付いた天人女房説話（犬飼七夕説話）との比較分析を行い、牽牛織女説話が7世紀以降の遣唐使によって中国からもたらされたと考えより、5世紀後半以前の倭国への牛馬の渡来とともに、朝鮮半島から一連の文化複合として渡来した可能性が高いという結論を得た。

猪甘（飼）については、角笛の伝来を含めた問題を中心に、追究を行った。歴史的・文化的特性については、『日本書紀』・『古事記』・『播磨国風土記』の記述と、猪狩猟を表す人物埴輪、昼神車塚古墳（大阪府高槻市）の角笛をもつ人物埴輪、装飾古墳の狩猟図文、高句麗壁画古墳の舞踊塚などの狩猟図、さらに舞踊塚の天人図や江西大墓（北朝鮮平安南道南浦市）の飛天図の角笛、安岳3号墳（北朝鮮黄海南道安岳郡）の角笛図、薬水里古墳で狩猟図の一部として馬上の人物が長曲の角笛を吹く角笛図などの比較分析を行った。猪（豚）の捕獲方法は、高句麗では騎馬スタイルで弓矢を使用するのが基本であるが、倭国の猪甘（飼）の場合は弓矢と猟犬を使用するのみであったと指摘した。さらに、

高句麗では大角笛が軍楽器または狩猟用として使われているが、昼神車塚古墳の角笛をもつ人物埴輪の角笛については、猪（豚）捕獲のために猪甘（飼）が使用した角笛であったことを指摘し、その系譜については、高句麗・百済などの朝鮮諸国に求められると考えた。渡来初期の実態については、猪甘（飼）が、鷹甘（飼）・馬甘（飼）・牛甘（飼）とは、渡来の時期や系譜、その要因、定着の仕方が大きく異なることを指摘した。古墳時代に部民として成立した猪飼部は、その源流（祖先）となった渡来人集団の末裔ではないかと考えられる。

力士については、力士埴輪特有の髪型である扁平髻の系譜に関する問題を中心に、追究を行った。歴史的・文化的特性については、『日本書紀』の記述と、片腕を挙げて片腕を腰にあてる土俵入りを連想する姿勢をとる扁平髻の力士埴輪（双脚立像）の古墳の配列状態の検討による性格分析、高句麗壁画古墳の角抵塚（中国吉林省集安市）などの角抵図や手搏図、三室塚などの天井を支える力士図との比較分析を行い、力士は、元来、強力の者の呼称と考えられ、褌に半裸身という容姿と扁平髻という頭髮の表現に特徴があり、渡来文化としての根拠も見いだせることを指摘した。その系譜については、広く東アジア世界での伝播を考えざるを得ないという結論にも達した。渡来初期の実態については、力士は、倭王権または支配下の首長層に従属した部民と考えられ、個々の力士埴輪の性格の特色（守護・瘳邪の役割）に相違が見られないことから、当初から、守護・瘳邪の観念を備えていたものと判断できた。さらに、力士埴輪の扁平髻に、仮面（袋状の被り物）または革製品の可能性を見いだそうとする見解に対し、否定せざるを得ないという結論を得た。

四神図については、竹原古墳（福岡県宮若市）壁画の解釈と系譜に関する問題を中心に、追究を行った。歴史的・文化的特性としては、『日本書紀』・『続日本紀』の記述と、竹原古墳の壁画と高句麗壁画古墳の通溝四神塚（中国吉林省集安市）などの朱雀図・玄武図・青龍図、角抵塚などの三足鳥図、天王地神塚（北朝鮮平安南道順川郡）の地神図、百済の宋山里6号墳（韓国忠清南道公州市）の朱雀図・玄武図・青龍図による比較分析を行い、前室奥壁右側図＝朱雀、前室奥壁左側図＝玄武または玄武的性格を有するもの、奥壁怪獣図＝青龍または青龍的性格を有するものであるとの見解を得た。竹原古墳の四神図の性格や描画の理由としては、高句麗や百済の四神図と同様に被葬者守護が目的と考えられるが、朱雀図が正確な図として招来されているにもかかわらず、玄武図や青龍図はその情報のみが伝わったと考えざるをえない。したがって、竹原古墳に四神図である朱雀図や玄武・青龍の情報が招来されていることは確かだが、四神の中央に黄龍を加えた五神図としての受容がないことや、集安・平壤周辺の高句麗壁画古墳とともに、竹原古墳の四神図とは描画の特徴に相違が見られることから、高句麗から百済を経由して、四神図が伝わった可能性が高いことを指摘した。また、中国の河南鄧県学庄村彩色画像磚墓の四神図を見ると、中国の四神図が直接的に伝えられたとも考え難く、それらも上記のような伝播経路を想定する際の根拠のひとつとして指摘した。古代中国が起源である四神が、高句麗から百済を経由して、6世紀後半の倭国へと伝わっていたことを証明できたことは意義深いといえる。竹原古墳の被葬者は、優良馬を保有していた倭国（九州地方北部）の首長層と考えられるが、先進的な四神図の受容を成

し得ており、特に百済と深い結び付きを持っていた可能性が高い。

猪甘（飼）を除いた鷹甘（飼）・馬甘（飼）・牛甘（飼）の技術の渡来は、遡っても4世紀末頃が限度といえ、その中心は5世紀である。6世紀に入り列島規模で定着・発達し、鷹飼部・馬飼部などの組織化がなされたといえる。

最後にまとめると、本論で、鷹甘（飼）、馬甘（飼）、牛甘（飼）、猪甘（飼）といった渡来系動物（家畜）を扱う部民、力士、四神図を分析対象としたのは、渡来文化受容とそれに伴う技術・文化の新展開が倭国の諸制度の整備とどのような関係にあるかが、日本古代国家の形成・展開を考えるうえで重要な検討課題の一つだという問題意識があり、それを考えるうえで適切な対象と考えたからである。一般的にみて5世紀は国際的な外交を重視した倭五王の時代、6世紀は武烈天皇の崩御によって、系列を異にする継体天皇が即位した時代である。6世紀に入ると、筑紫国造磐井が反乱をおこすという一大事があったこともよく知られており、倭王権の内部に動揺がみられることが従来から指摘されている。

6世紀の倭王権は自らの主導のもとに内在的な政治力の強化を目指して、5世紀に朝鮮諸国の政治情勢と連動して朝鮮半島から倭国に移住した渡来人によってもたらされた技術・文化を利用して部民の組織化をすすめたと考えられる。このことが、古代日本国家形成の萌芽期ともいえる5・6世紀に渡来文化が果たした歴史的な役割ないしは意義といえる。

さらに、個別に明らかにした成果のなかには、現代日本の伝統につながっているものも存在した。そうしたものが単純な日本古来のものではなく、渡来によってもたらされたという事実を具体的に明らかにしたことは、伝統とは何か、また伝統とされる行事の解釈が妥当かどうか、という問題を考えるうえでも重要な材料を提供したといえる。このことは、渡来文化研究の現代的な意義と成果ともいえる。

学位論文審査報告書

2020 年 2 月 14 日

1 論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専 攻 人間社会環境学専攻

氏 名 基峰 修

2 学位論文題目（外国語の場合は、和訳を付記すること。）

動物を扱う部民を中心とした渡来文化の考古学的研究

—文献と埴輪・壁画資料による比較分析の視点から—

3 審査結果

判 定（いずれかに○印） ○合 格 ・ 不合格

授与学位（いずれかに○印） 博士（社会環境学・○文学・法学・経済学・学術）

4 学位論文審査委員

委員長 古 畑 徹 ⑤

委 員 足 立 拓 朗

委 員 中 村 慎 一

委 員 中 村 誠 一

委 員 黒 田 智

委 員

（学位論文審査委員全員の審査により判定した。）

5 論文審査の結果の要旨

本博士論文は、古墳時代中・後期（5・6 世紀）に、朝鮮半島から日本に伝わった渡来文化について、渡来系動物を扱う部民などを中心に分析し、その歴史的・文化的特性の抽出と実態の明確化を行い、部民の組織化の問題を中心にその歴史的意義を追求しようとしたものである。

序章では、研究の目的・方法及び渡来文化に関する考古学的研究の研究史が述べられ、研究史では比較分析という方法の有効性を明らかにし、それを採用することの妥当性を主張する。第1章では鷹甘（飼）について、鷹鈴と鷹狩りの組織化の問題を中心に論じ、鷹甘が飼育・訓練した特徴を示す尾羽につけた鷹鈴が渡来文化の証拠であること、高句麗・百済で盛行した鷹狩りが倭国で鷹飼部として組織化され、6 世紀に列島規模で拡充したこと、鷹匠埴輪は被葬者ではなく部民としての鷹甘であることなどを指摘する。第2章では馬甘（飼）について、その身分と軍馬生産体制の問題を中心に論じ、馬甘人物埴輪等から馬甘の当初における身分的低さを指摘し、馬甘部の組織化・軍馬生産体制の拡充と朝鮮半島情勢との関係性にまで言及する。第3章では牛甘（飼）について、薬としての牛乳生産とその性格を中心に論じ、牛が5 世紀後半以前に馬とともに渡来したこと、その飼養数が極めて少ないのは支配者への薬としての牛乳提供が目的であったこと、渡来初期には馬と一緒に飼育され馬甘と牛甘は分化されていなかったこと等を指摘する。第4章では第3章の補足として牽牛織女伝説の伝来年代を追求し、5 世紀後半以前の倭国への牛馬渡来に伴う一連の文化複合として渡来した可能性が高いと結論付ける。第5章では猪甘（飼）について、角笛の伝来問題を中心に論じ、猪（豚）の捕獲方法が高句麗と日本では異なること、その際に使用された角笛の系譜が高句麗・百済に求められること、家畜化された猪（豚）と猪飼技術の渡来は古墳時代以前で、猪甘部はその渡来集団の末裔と見られ、鷹甘・馬甘・牛甘とは渡来時期・系譜・定着の仕方が異なること等を指摘する。第6章では力士について、力士埴輪特有の扁平髻の系譜問題を中心に論じ、褌に半裸身という容姿と扁平髻に渡来文化としての根拠が見いだせることを指摘し、相撲が鷹甘などと同じ5 世紀に渡来したとするとともに、扁平髻を仮面と見なす説を否定する。第7章では四神図について、6 世紀後半の竹原古墳壁画の解釈問題を中心に論じ、その図像の伝来が中国・高句麗から直接ではなく百済を経由したものであることを明らかにする。終章では個別の検討結果を再確認したうえで、それらを総合し、猪甘以外の鷹甘・馬甘・牛甘の技術の渡来の中心が5 世紀にあり、6 世紀に入って列島規模で定着・発展し、部民として組織化されたと結論づけ、その背後に朝鮮半島情勢との連動性があることを指摘した。

本研究でまず注目すべきはその方法論で、いままで考古学研究ではあまり利用されていなかった文献史学の成果を取り入れて議論をし、壁画などを含めて多様な史料論の成果となっていることは、渡来家畜とその技術の伝来の問題を道具に注目して分析したことと合わせて、新しいタイプの考古学研究として非常に高く評価できる。また、各章の論述はいずれも実証的かつ着実で、それぞれに十分説得力のある見解が提示されていることも高く評価でき、各章個々の議論と成果はそれぞれに非常に高い水準にあるといえる。

その一方で、全体の総括がうまく書き切れていないことは指摘せざるを得ない。論文の「売り」となる部分が十分に示せておらず、オリジナリティがあまり強調されていない点は、もどかしく、かつ非常に残念である。また、部民研究のなかでの本研究の位置づけにおいて、文献史家である田中史生の考古学研究への期待論を前面に押し出してしまったために、主が文献でそれを補う従の位置に考古学があるかのような印象を読者に与えてしまった点も惜しまれる。このほかに、部民制研究に何を新たに加えたかを述べるべきであった、猪飼と鷹飼・馬飼・牛飼などの技術がなぜずれて渡来するのか説明すべきだったなどの指摘が審査委員から出された。個別研究でも、他の解釈の可能性がある史料や図像などの問題がいくつかあることが、審査委員から指摘され、文章が長文過ぎて理解しにくい箇所が少なからずあるとの指摘もあった。

以上のような問題点はあるものの、方法や個別研究の成果を否定するようなものではなく、また博士学位論文審査要項の第6条（博士学位論文の審査基準と審査項目）にすべて適合しているので、本論文は博士の学位授与に相応しい水準にあると判断され、全員一致で合格とした。